

## 背くらへの距離

「なんだあ？」

目を見開いた途端、見えた光景に葵は目を瞬いた。

その日は朝から、雲ひとつない快晴。

絶好のバーゲン日和と、何件ものスーパーをハシゴして、学校にたどり着いたときには、すでに正午近くだった。

(こりゃあ・・・授業に出ても、どうせすぐに昼休みになるな)

といっても、まともな授業を受けた記憶など、片手に足りるほどでしかなかったが。

ともあれ、今から教室にいて、同じクラスの気の強い理事長やら、クラス担任にわめかれるのはあまり嬉しくない。葵は一路、教室に向けていた足を裏庭に向けた。

授業中なので、裏庭には予想していたとおりに誰もおらず、葵の貸切状態だった。それを良いことに、葵はその場所で身体を横たえて、昼休みまでのんびり昼寝でもすることにした。

暖かな草むらに顔をうずめているうちに、睡魔はすぐに襲ってきて、

葵はそれに抵抗なく身をゆだねた。それが、今日の正午前のことである。

それから数十分後、目を覚ました葵は、冒頭のような素っ頓狂な声をあげることになった。

草に埋もれて情眼をむさぼっていたはずの葵の頬にいつの間にか、柔らかい、ふわふわしたものが触れていたのだ。

「っー」

慌てて身を起こして、いつの間にか目の前で眠っているらしい存在に気づき、目を見張る。

「わびこ」

それは、葵の幼馴染であり、妹のような存在である少女だった。

頬に触れた、ふわふわしたピンク色は、彼女のトレードマークである、ゴムでちよんとつまんだ横髪であったようだ。彼女はその小さな身体を葵にぴったりと寄せ、すぴすぴと眠りをむさぼっている。

(・・・いつの間に)

葵は少女が近づいてきたことに全く気づかなかった自分を不思議に思うが、そういうこともあるかと思いなおして、もう一度身体を横に倒した。

何よりこの少女が隣にいることは、葵にとっても不自然なことでは決してなかったから。

しかしもう一度寝入ろうかと再び目を閉じてみた葵ではあったが、数秒後、結局諦めて目蓋を上げることとなる。どうやら睡魔は、完全に去ってしまったらしい。

それでもこの場所から立ち去る気も無かったため、暇をもてあました彼は、目の前の寝顔に手を伸ばした。つん。

指でその柔らかな頬をつつくと、少女の眉間にわずかなしわが寄る。続けて二、三度指を押し付けると、彼女はむずがるように手を振ったが、目を覚ます様子はなかった。

葵は小さく笑みを漏らす。一度寝入ったら、中々起きないこの少女が、この程度で目を覚ますはずはないことも、長い付き合いの葵は知っている。

(・・・こうしてみるとこいつって、昔っから全然変わっていないのな) すぐ間近にある、無邪気な愛らしいともいえる寝顔を見て、そんなことを思う。

家が近所であったためか、物心ついたときには、少女は既に葵の側にいて、幼い頃にはかなりな腕白だった葵の後ろを、ちよこちよこといつもついてきた。

現在の彼女からは到底想像もできないが、活発だった葵とは違い、あの頃の少女は、かなりな泣き虫で弱い存在であったから、葵にとって当時の少女は、足手まとい以外、何者でもなかった。

それが、いつからか。

側にいるのが当たり前になって。

その姿が見えないと、無意識に捜してしまうようになって。

葵の服の裾を掴むのが癖だったその小さな手を、自分から引きよせて握るようになったのは、もう随分と昔のことだ。

「ん・・・」

唇から小さな声が洩れ、少女がわずかに身体を丸める。少し風が出てきたから、寒いのかもしれない。葵は少々迷った末、少女を引き寄せ、その小さな身体を自らの腕で包んでやった。

「んん・・・」

少女はもぞもぞと動いた後、葵の温もりが心地良かったのか、自ら身体を密着させてきた。葵は反射的に身体を硬直させたが、少女はまだ夢の中なのか、むにやむにやと何かをつぶやいた後、再び安らかな寝息を立てた。

意識したこちらが馬鹿に思えるような、能天気な寝顔だ。

「・・・ったく」

葵はそんな少女を見て、呆れたように漏らした。しかしその身体が寒くないように、尚もしっかりと包んでやった。

腕の中の身体はまだまだ子供っぽく丸みを帯びてはいるが、葵よりはかなり細い。やはり少女も、「女」であることには違いないのだろう。

たまにもう少し女らしさとか、警戒心とかを身につけたほうが良いのではないかとも思うが、本当にそれをされたらきつと、ひどく戸惑うであろう自分のことも、葵にはわかっていた。

(だって……わびこだもんな)

少女は葵にとつて、昔から『女』とは違う、ひどく自分に近い生き物だった。勿論それが本当はただの錯覚であることも、心の底では理解しているのだが。

それでも認めたくないと言うのが本心なのかもしれない。だって認めてしまえば、きつと今のままではいられないから。

一番親しくて、誰よりも近い、「幼馴染」のままでは。

『葵ちゃんっ！葵ちゃん、見てっ！』

葵は不意に思い出す。

あれは中学に上がる少し前だった。葵の部屋に突然少女が駆け込んできたことがあった。

『見て見て！わびこ、制服をつくってもらったんだよ！』  
作ってもらったばかりだというセーラー服を着て、葵の前で少女はくるりと回って見せた。

いつもと同じように、無邪気な笑顔ではしゃいでいたというのに、初めてみる制服姿は、何故だかいつもよりずっと、少女を大人びて見せて。

『ねえねえ、似合う？葵ちゃん』

そう問いかけた少女に、「いつもと変わらねえよ」と答えたのは、なんだか面白くなかったから。

多分、あのときまで葵は、少女を『女』だと気づいてすらいなかったのだ。だから少女が大人になり、葵とは違う生き物になるのが、なんだかひどく許せないことのように思えた。

けれど今は……あの頃より少しだけ、少女が女であるということの「意味」を理解している。

例えば昔のように、こんなふうは無防備に側で寝入っていても、ぴつたりと身体を寄せあっても。

少女はともかく、自分は昔のように無頓着では、いられないこと。

葵は少女の寝顔に、もう一度視線をやる。無邪気な、子供のような、昔から良く知っている寝顔だ。

でも確かに、それは少しずつだが変わっている。

大きなきらきらした瞳は変わらないが、こうして瞳を閉じると、以前よりもずっと、顔の輪郭がしなやかな線を描くようになったとわかる。

昨日よりは今日。今日よりは明日。こうして少しずつ、少女は大

人へ、「女」へと変わっていくのだ。

葵がどんなに今のままで——自分と一番近い生き物のままで居て欲しいと、望んでいても。

今は、葵の肩の辺りまでしかない身長も、いずれはもっと高くなり、髪が伸びて……少女はきっと美しい『娘』に成長するだろう。

そしていつかは、愛する男が出来る。

そこまで考えて、葵は思わずむっとした。

自分でもその感情に説明はつけられなかったが、少女をいつか手に入れるであろう男が、ひどく気に食わないと思ったのだ。

しかしすぐさま自分の思考の馬鹿馬鹿しさに気づき、ため息を漏らす。

だって、そうではないか？

今はまだ、少女は少女でしかない。

葵の想像である、いつかは現れるであろう『その男』も、今はまだ、存在すらしていないのだ。

「葵……ちゃ……」

不意に少女の口元から自らの名前が漏れる。目を覚ましたかと思っただが、そうではなかったらしい。少女は変わらず目蓋を閉じたまま、幸せそうな笑みを浮かべている。

夢の中でも少女は、自分と共にいるのだろうか？  
その愛らしい寝顔を見て、葵は思う。

いつか、少女は大人になり、女になって、自分の元から離れていくのかもしれない。そのときは少女が愛する男を見て、自分が嫉妬に駆られる日が、きっと来るのだろう。

けれどそれは、今ではない。

今はまだ、少女はここにいる。

葵の腕の中で、安心してきってその全てを葵に委ねている。

「いつかなんて……そう簡単に、来させつかよ」

葵は少女の身体を抱えなおして目を閉じる。

腕の中のぬくもりがひどく心地良くて、もうひと眠り出来そうだと思った。